

『聖なる者となること』 (要旨)  
 聖書箇所： I テサロニケ 4:1~12

苦難の中にあるテサロニケ教会のクリスチャンを何とか励まそうとしていた使徒パウロ。教会の様子が気掛かりで、居ても立っても居られず、名代のテモテをテサロニケ教会に派遣しました。その後、テモテは、テサロニケ教会のクリスチャンは信仰に堅く立っていることをパウロに報告しました。それを受け、パウロはとても喜び、かえって自分たちが慰められたと言いました。そのようなテサロニケ教会ですが、それでも信仰上の不足がありました。今日開いた聖書箇所は、そうした教会に対するパウロのアドバイスです。

**[1] パウロがテサロニケのクリスチャンに宛てた勧め**

4章1-12節は、使徒パウロの「倫理的説教」と呼ばれています。この「倫理的説教」は、抽象的なものではなく具体的な勧めです。

まず、性的な純潔を守ること(3-8)。次に兄弟愛について(9-12)です。

前半の性的な純潔についての勧めは、テサロニケ教会の抱える課題でしたので、パウロは丁寧に取り扱いました。後半の兄弟愛については、すでにテサロニケ教会で実行されていることなので、さらに兄弟愛に生きることができるように「自分の仕事に励み、自分の手で働くこと」(11)を励ましました。

**[2] クリスチャンの生活の実際**

クリスチャンになったばかりのテサロニケ教会のメンバーは、クリスチャンの生活が具体的にどのようなものであるかを知らなかったでしょう。

当時のテサロニケ教会のクリスチャンが生活していたギリシャ・ローマ社会では、結婚制度が体をなしていませんでした。姦通は飲食と同程度に見られており、結婚における純潔は軽んじられていました。たとい「情欲におぼれる」(5)ことが夫婦の信頼関係や平和を破壊するものであっても、仕様が無いことだと捉えていました。

パウロはそうした社会に生きるクリスチャンに、淫らな行いを避け、自分のからだを聖なる尊いものとして保つようにと勧めました(3-4)。世の人々の生活の実際がどうであれ、「神のみこころは、あなたがたが聖なるものとなること」(3)だと、クリスチャン生活の指針をパウロは教えたのです。

**[3] クリスチャンは何を大切にするのか**

パウロの「倫理的説教」は、クリスチャン生活

における禁止事項を明確にする目的でなされたものではありませんでした。クリスチャンの目指すべき目標は、自分たちをいかに喜ばすことができるかではなく、「神に喜ばれるために」(1)生きることだからです。

パウロは次のように語りました。「神に喜ばれるために…」(1)、「神のみこころは…」(3)、そして「神が私たちを召されたのは…」(7)と。

パウロは、横にいるクリスチャンと自分を比較することで生き方を決めるのではなく、神様の前に一人ひとりが自らを省みるよう励ましているのです。

**[4] いつかではなく今日みことばに聞くこと**

パウロはテサロニケ教会の信仰の不足を補うべく「倫理的説教」をしました。この説教は、クリスチャンであることの条件として語られたものではありませんでした。現に「神に喜ばれるために」歩んでいるクリスチャンに向け、「ますますそうしてください」(1)、「ますます豊かにそれを行いなさい」(10)と励ましているからです。

今いるところで満足することなく「ますます」神に喜ばれるために歩むのです。

いつか完全なクリスチャンになる日が来るのを夢見るのではなく、今日、聖霊を与えてくださる神様のみことばに聞き従う者でありますように。

